

第 34 回日本ホワイトヘッド・プロセス学会 予稿集

2012 年 9 月 9 日 (日)

研究発表：第三講義室・第一演習室

(報告 30 分、質疑応答 15 分)

セッション 2 (5F 第一演習室)

# カントの超越論的観念論と有機体の哲学<sup>1</sup>

## —「カント哲学の逆転」についての考察—

中央大学大学院

文学研究科 哲学専攻 博士後期過程

山分大史

### はじめに

本発表は、有機体の哲学の概念体系に解釈を与えることを目的とする。ここで軸となる基本的な観点は、「カント哲学の逆転」である。ホワイトヘッドは『過程と実在』において、有機体の哲学がカント哲学の逆転であると言っている<sup>2</sup>。この「逆転」とはどのようなものだろうか。どのような意味でホワイトヘッドはカント哲学を逆転するような哲学体系を構築しているのだろうか。この二つの哲学体系を比較し、有機体の哲学がもつカント哲学と

---

<sup>1</sup> 本発表においては、ホワイトヘッドとカントの著作を引用および該当箇所を指示する際には、書名は以下のように略記し、該当するページ数を引用文の後に付記する（ただし、『純粹理性批判』の引用に限り原版のページ数を付記し、さらにその数字の前に第一版のページ数であることを示すAを、あるいは第二版のページ数であることを示すBを付記する）。なお、引用文中〈 〉で括られている語句は原文中では引用符で括られている語句であり、また〔 〕で括られているものは引用者による補足である。また、引用文中の傍点はとくに断りがない限り、原文中のイタリック体か隔字体である。

（ホワイトヘッドの著作）

・PR… *Process and Reality*, corrected edition, Griffin, D. R., Sherburne, D. W., eds., New York: Free Press, 1978.

・Sym… *Symbolism: Its Meaning and Effect*, New York: Fordham University Press, 1985.

（カントの著作）

・KrV… *Kritik der reinen Vernunft*, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1998.

・Prol… *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik*, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 2001.

上記のもの以外に引用する著作は本稿最後のページの引用文献一覧に記す。なお、これらの引用および該当箇所の指示に際しては、引用文の後に著者名、発行年、該当するページ数を付記する。

<sup>2</sup> このとき「カント哲学」と言われているものは『純粹理性批判』を中心としたカントの理論哲学を指すと考えられる。と言うのも、ホワイトヘッドは別の箇所で、「〈実践理性〉に関する彼の議論においては、カントは有機体の哲学におけるのと類似の意味での〈満足〉も認めている」（PR p.152）と述べており、カント哲学のうちの実践哲学については、有機体の哲学との何らかの形での方向性の一致をホワイトヘッドが認めていると考えることができるからである。本発表においては、このようにホワイトヘッドが述べているカントの実践哲学における「満足」と有機体の哲学におけるその「類似性」については追究しない。

の差異を浮き彫りにさせることによって、有機体の哲学の概念体系の特質を露わにしていることが本発表の狙いである。

本発表は大別して二つの部分に分けられ、後半部分はさらに二つに分けられる。まず初めに、ホワイトヘッドが『過程と実在』の中で実際に「カント哲学の逆転」に言及している箇所を引き、そこで述べられている言葉にもとづいて、カント哲学と有機体の哲学がもつ逆転的な構造をひとまず素描するが、その逆転的な構造だけをもってしては十分な意味で「カント哲学の逆転」であると言えないということが確認される(1)。その後で、この構造の転換に必然的に伴われる、「時空」と「因果性」という二つの概念の身分や所在の「逆転」に注目し、有機体の哲学におけるこの二つの概念それぞれについて、カント哲学との違いを踏まえながら考察していく(2-1、2-2)。

## 1

ホワイトヘッドが直接「カント哲学の逆転」に言及している一つの箇所を引用しておこう。

『純粋理性批判』は、主観的諸与件がひとつの客観的世界における現象へと移っていく過程を記述している。有機体の哲学は、客体的諸与件がいかにか主体的満足へと移っていくか、また、客体的諸与件における秩序がいかにか主体的満足における強度を提供するかを記述しようと試みる。カントにとっては、世界は主観から出現する。だが、有機体の哲学にとっては、主体は一いや、主体というよりも自己超越体は一世界から出現するのである。(PR p.88)

ここで述べられていることを単純に文字通り受けるならば、ホワイトヘッドの言う「逆転」は次のようなものであると、ひとまずは解釈できるだろう。

(カントの認識論)		(有機体の哲学)
① 主観による世界の構成	→	世界からの主体の生起

カントの認識論において「世界は主観から出現する」かどうかという点については後で論じるように問題が含まれるが、有機体の哲学が「主体 - 自己超越体が生起する」という過程を論じるものであるということは容易に理解できるだろう。有機体の哲学は、個々の現実的存在がその現実世界における様々な与件を抱握して満足という自己実現を目指し、さらに満足を迎えた後は、今度は自ら客体として他の主体の合生に寄与するという一連の過程を記述している。この過程は、その全体を貫いて存在 (being) をもっている主

体が通過していく過程などではない。反対に、それを通して主体が生成 (becoming) していくという過程である。つまり、この過程は、先立って存在する主体が与件としての現実世界を享受し、満足という状態に至るという過程なのではなく、さまざまな与件の感受が主体的統一へと錬成されていくという過程なのである。したがって、有機体の哲学においては、「落ち着しており、現実的で、そして既に生成した諸存在からなる共同体」(ibid. p.65)としての現実世界がまず在り、そこから主体としての現実的存在が生成する。つまり、「世界→主体 (自己超越体)」という順序になっている<sup>3</sup>。

その意味では、有機体の哲学は確かにカントの認識論とは *subjectivity* の位置づけが逆である。なぜなら、カントの認識論においては、経験する主観はその経験そのものの成立のために前提されているからである。『純粋理性批判』の冒頭で述べられているカントの認識論全体を通底する考え方は「たとえわれわれの一切の認識が経験をもつて始まるとしても、だからといって、必ずしも認識がすべて経験から生ずるというわけではない」(KrV B1)ということである。経験は「たしかに、何かあるものがかくかくの性質をもつということをわれわれに教えてくれるが、それが他ではありえないということは教えてくれない」(ibid. B3) のであり、その意味で、経験を通して得られるものだけでは必然性や普遍性について語るができない。だが、数学の諸定理や自然科学の諸法則に代表されるように、事実として、必然性と普遍性を伴うアприオリな認識が人間には可能である。このようなアприオリな認識 (カントの目的としては、アприオリかつ、知識を拡張する総合的な認識) が可能であるためには、経験自体からは独立しつつ、経験自体に秩序を与えることが可能な要素が主観のうちに想定されざるをえないとカントは考える。こういった要素には「経験に属するものが全く見いだされない」(ibid. A20/B34) という意味で純粋という形容詞が与えられる。こうした純粋な要素 (純粋直観や純粋悟性概念) が雑多な感覚質料を統一し形式を与え、客観的な認識を成立させる。このように、カントの認識論においては、秩序だった経験を成立させるための条件を備えた主観が、経験そのものに先立って存在している<sup>4</sup>。つまり、「主観→世界」という順序になっている。この意味で、経験そのものの前に

<sup>3</sup> ただし、合生の過程には「主体的統一」というカテゴリー的拘束 (Categorical Obligation) がある。これは、満足を構成する諸々の感受が最終的な主体としての統一を目指しているがために、相互に矛盾することはない、という合生に通底する原理である。これは合生の初めから主体としての統一が、「予定調和」として、予め定まっていることを意味している。このカテゴリー的拘束があるからこそ、「感受はそれを享受する現実的存在から分離されることはできない」(PR p.221) と言われる。この意味では、有機体の哲学においても、合生の過程を貫いて主体が前提されていると言うこともできるかもしれない。しかしながら、次のような説明があることは見落とされてはならない。「このカテゴリー [主体的統一のカテゴリー] は、一つの主体がその構成要素である感受各々を支配する最終的な目的 [end] である、という一般的原理の表現である」(ibid. p.223 傍点は引用者による)

<sup>4</sup> もちろん、カントは「純粋理性の誤謬推理」において実体的自我の存在を否定するのではあるが、純粋直観や純粋悟性概念といった諸々のア・プリオリな認識機構の総括としての超越論的統覚はある。シャビーロは、この超越論的統覚という形をとったカントの主観について、「カントは事実上、コギト—つまりそれが離れて観察しているだけの世界から、分

subjectivity が存在しているのか、それとも subjectivity は過程を通して実現していくものであるのか、という順序の逆転がこの二つの体系において認められるだろう。

しかしながら、ここで、カントの認識論と有機体の哲学それぞれにおける「～から現れる」ということがどのような意味であるのかということに注意する必要がある。カントの認識論において「世界が主観から現れる」というのは、あくまで「世界の見え方が主観によって構成されていく」という意味であると解釈されなければならないだろう。なぜなら、いま述べたように、主観のもつ諸形式が与件に秩序を与えることによって秩序だった世界の見え方が獲得されるとはいえ、それは決して世界が存在論的な意味で主観に依存しているということを意味するわけではないからである。確かに、カントの認識論においては、主観のもつ諸形式が客観的認識の成立のための必然的条件である。それがなければ客観的に妥当する経験はあり得ない。しかしそれは、経験される対象としての世界自体の存在が依存する条件ではない。これに対して、有機体の哲学にとって「主体（自己超越体）が世界から現れる」ということは、主体 - 自己超越体の形相的構成（formal constitution）が与件としての現実世界に依存しているという意味を含んでいる。与件としての現実世界の把握なくして、主体の合生はあり得ないのである。このように、「～から現れる」ということが、一方のカントの認識論においては認識論的な意味であるのに対して、他方の有機体の哲学においては存在論的な意味であるというずれがある。

## 2

以上のようなずれがあることを考えれば、カントの認識論が「主観→世界」であるのに対して、有機体の哲学は「世界→主体（自己超越体）」になっているという構造の転換があるにしても、それだけでは果たして有機体の哲学が本当に「カント哲学の逆転」であるかどうかは判然としない。というのも、このような構造の違いは、単に有機体の哲学がカント哲学の問題領域とは異なるところを問題にしているということを表しているに過ぎないとも言えるからである。それでは、つまるところ、有機体の哲学の何をもって「カント哲学の逆転」と言えるのだろうか。

この問いに答えを見出すために、ここからは有機体の哲学とカント哲学の構造だけではなく、両者の体系内における諸概念の位置づけに目を向けてみたい。カントの認識論においては、秩序だった経験が成立するための諸条件は主観の側にある。それ自体では無秩序な感覚質料に主観が形式を与えるのである。ではこのカントの認識論の構造を転換し、経

---

離されており、左右されることもないし、暗々裏に先立っているようなデカルト的主観—を改めて肯定している」（Shaviro, 2009, p.50）と指摘している。

<sup>5</sup> カントにとって、経験の成立のための必然的条件が「存在論的条件」ではなく「認識論的条件」として考えられるべきであるということは（Allison, 2004, pp.11-19）を参照。

験する主体が世界から現れるという構造を考えるならば、どのような変化があるだろうか。確かなのは、この場合、秩序は世界の側からもたらされるというモデルになるはずだということである。かくして、カントにおいては経験に秩序を与えるために主観が対象に与えると想定された二種類の「形式」が、有機体の哲学においては世界から与えられると考えられることになるのである。このことから、次の二つの「逆転」を考えることができる。

	(カントの認識論)		(有機体の哲学)
②	直観形式は純粹直観である	→	「直観形式」は与件である
③	因果性は純粹悟性概念である	→	因果性は順応（因果的効果）である

これは、カントの認識論と有機体の哲学の両者において、同一であるか、あるいは類比される概念の身分あるいは所在に関する「逆転」である。それではここからは、この二つの「逆転」がそれぞれどのような内容になっているのかを考察し、有機体の哲学の特質を描出していきたい。

## 2 - 1 : 時空に関する「逆転」

②は時空という概念の身分に関する「逆転」である。ホワイトヘッドは、延長連続体について論じている箇所、「体系的図式は、現実的な過去と潜勢的な未来を包括するその完結性を以て、各々の現実的存在の積極的な経験において抱握される。この意味で、それはカントの〈直観形式〉である。しかしそれは与件としての現実世界から導き出されるのであり、言葉のカント的意味では〈純粹〉ではない」(PR p.72)と、有機体の哲学においてカントの直観形式に類比されるものが経験的な与件であることを述べている。カントの直観形式とは空間と時間に他ならない。カントは感性をあらゆる経験がそこから始まる発端であるとするから、空間と時間という感性の形式は、経験が成立するための最も根本的な条件である<sup>6</sup>。

ホワイトヘッドは、空間と時間よりもさらに一般的な連続量として「延長」を考える。逆に、空間と時間は延長の限定的な側面に過ぎない<sup>7</sup>。現実的存在は、その生成しつつあるものとしての側面においてとらえられる発生的区分 (genetic division) の観点からすれば原子的であり不可分であるが、その満足においてとらえられる（言い換えれば、「concreteなもの」としてとらえられる）同位的区分 (coordinate division) という観点からすれば延

<sup>6</sup> 「空間と時間はあらゆる（外的および内的）経験の必然的条件として、われわれのあらゆる直観の主観的条件に他ならない」(KrV A49/B66)

<sup>7</sup> 「空間の延長性は実に延長の空間化であり、時間の延長性は実に延長の時間化である」(ibid. p.289)

長的であり、可分的な延長的領域を占めるものとして考えられる<sup>8</sup>。『過程と実在』の第四部「延長の理論」において展開される幾何学は、この現実的存在が占める（あるいは占め得る）延長的領域に基づいてその幾何学的要素が定義されていく。それに基づいて幾何学がなされる以上、延長的領域はそれを占める現実的存在から抽象されて独立に考えられることが可能である。ただしその場合には、それは現実的存在によって原子化（atomize）されるべき潜在的なものとしてのみ考えられる。延長連続体とは、こうした潜在的な延長的領域の集合体に他ならないだろう。延長連続体は「一つの共通世界の連帯性において統合する、関係づけの要素」（PR p.72）であると言われる。なぜなら、幾何学的な関係ばかりか、二つの現実的存在が空間的に接しているだとか二つの現実的生起が立て続くなどといった、ごく基本的な空間的ないしは時間的關係もそこにおいて成り立つような潜在的な場として延長連続体が考えられるからである。さらに、延長連続体は「実在的潜勢態 [real potentiality] の最も一般的な図式であり、他の一切の有機的關係の背景を提供する」（*ibid.* p.67）と言われる。「実在的潜勢態」については、この箇所少し前にある「現実世界が供給する与件によって条件づけられる」（*ibid.* p.65）というそれについての記述や、説明のカテゴリーの第六番目（*ibid.* p.23）を参照すれば、それは主体の属する現実世界のあり方によって当該の主体の満足のあり方、つまり実現する経験のあり方が左右されるという事態を表している、と考えられるだろう。つまり延長連続体が実在的潜勢態の最も一般的な図式であるということは、現実世界における個々の要素の延長的關係が、経験のあり方を左右する最も根本的な要素であるということの意味すると考えられる。

では具体的にはどのような形で経験のあり方を左右するのだろうか。ここでは極端に、もし延長連続体という關係性の母体的な場がなかったらどうなるかを考えてみれば良いかもしれない。もしそうなれば、先ほど述べたような「接する」といった非常に基本的な關係性さえも宇宙には成り立たないことになる。宇宙における個々の要素はバラバラであり、それはまさに「混沌」と呼ぶに相応しいのではないだろうか。ホワイトヘッドは現実的存在の集合を結合体と呼ぶが、何らの秩序ももたない非社会的結合体は「〈混沌〉という觀念に相応する」（*ibid.* p.72）とホワイトヘッドは述べている。つまり、延長連続体は延長的關係の体系的図式という、宇宙が混沌になってしまわないための最低限の秩序を担保していると言えるのである。ホワイトヘッドによれば秩序をもった結合体は「社会」を形成する。かくして、経験に実在的潜勢態を提供する現実世界が秩序をもった社会であるためには、少なくとも延長連続体という場が必要なのである。このように、経験に与えられる最も根本的な秩序であるという意味で、延長連続体における延長關係の体系的図式がカントの感性の形式と類比されると考えられる。

だが、それがカントの感性の形式と本質的に異なることは、延長連続体がもたらす秩序（体系的図式）が与件として主体に感受されるということである。ホワイトヘッドによる

---

<sup>8</sup> 「発生的区分は合生 [the concrescence] の区分であり、同位的区分は具体的なもの [the concrete] の区分である」（PR p.283）

秩序についての説明によれば、秩序は客体化された与件から感受され、主体の満足の強度として結実するものであるとされる。このことは本発表の始めに引用した文の一つ目にあった、「有機体の哲学は、…客体的諸与件における秩序がいかん主体的満足における強度を提供するかを記述しようと試みる」という言葉からも示される通りである。また、あるときにホワイトヘッドは、秩序という概念がそれに相関する無秩序という概念と対比されない限り、「〈秩序〉は〈所与性 [givenness]〉と同義でなければならない」(ibid. p.83) と言っているが、これは、単にその否定との対比がなければ、秩序という概念から価値が捨象されるということを言い表しているだけではないだろう。「所与性」がそれ自体で既に秩序だっているという有機体の哲学における事実をも含意していると考えられる。だが、このように秩序が経験を通して与えられると考えられるならば、秩序というものが偶然的なものになってしまうのではないだろうか。カントが言っていたように、経験は秩序が「他ではありえないということは教えてくれない」のである。しかしながら、有機体の哲学にとってはそれで良いのである。必然的な唯一の秩序があり得ないということこそ有機体の哲学にとっての事実なのである。ホワイトヘッドが「すべての現実的存在が達成したり達成しそこなったりするような、ただ一つの理想的な〈秩序〉は存在しない」(ibid. p.84) と言っているように、宇宙の全歴史を貫いて不変であり必然的に妥当するようなただ一つの秩序というものは、有機体の哲学の宇宙においてはあり得ない。だからホワイトヘッドは、現在の宇宙時代という一つの社会を越えた先にある別の社会について、「われわれの諸経験においては実現されておらず、またわれわれの思い浮かべる諸々の想像によっても予見されないような、新しい関係性をもった諸存在が現れ、宇宙に新しいタイプの秩序を導きいれるだろう」(ibid. p.288) と言っている。現在の宇宙時代という限定された社会的秩序をもつ結合体の背景には、より一般的な秩序が通底するより広い社会がある。ホワイトヘッドによれば、この宇宙においては、より特殊な社会的秩序とより一般的な社会的秩序が「重々層 [layers of social order]」(ibid. p.90) をなしているのである。したがって、ある社会において妥当する秩序や法則は、より一般的な社会における特殊事例に過ぎないということもあり得る。たとえば、空間に関してホワイトヘッドは、「単なる延長性 [extensiveness] に関する限り、空間は、われわれがいる現在のエポックにおける穏当な 3 次元の代わりに、333 次元をもってもいい」(ibid. p.289) と言うし、さらに時間に関しても「単一のものであれ多様なものであれ、時間の連続性 [seriality] は延長という単独の観念からは引き出され得ない」(ibid.) と言う。つまり、空間と時間がいくつ次元をもつかということは、ある特殊な社会において妥当する事実に過ぎないということである。より一般的な視点に立つならば、空間や時間の次元性とは「ただの延長という観念には含まれていない付加的な事実」(ibid.) である。この点において、有機体の哲学の考え方は、「空間は 3 次元をもつ」、「時間は 1 次元のみをもつ」という命題を必然的に妥当する命題として規定しようとするカントの超越論的解明 (KrV B § 3, § 4) を完全に「逆転」した考え方であると言えるだろう。



## 2 - 2 : 因果性に関する「逆転」

③は因果性という概念の身分に関する「逆転」である。まず、カントの「経験の類推」における記述に従えば、カントにとっての因果性とは、相次いで知覚された諸表象に必然的結合を与え、客観的な時間順序を規定するための純粹悟性概念である。これもまた空間と時間のように、感性に与えられた質料に対して主観が与える形式であると言えるだろう。ホワイトヘッドによれば、因果性に関するカントのこの考え方は「単純な位置づけの誤謬」を犯しているという (Sym, p.38)。ホワイトヘッドの考えでは、カントは時間的に隣り合った二つの与件を、お互いに本質的なつながりをもたない「単純な生起」とみなしているという。そのため、このような諸々の「単純な生起」が個別的与件としてそれぞれ感性に与えられる限りでは、それらの間の関係性を記述するような普遍的な法則は引き出され得ない。ホワイトヘッドの解釈では、このような法則性を説明するためにカントは、「意識的に把握された個別的諸事実は、単なる個別的諸与件と、修正を加えられた諸与件の中に自らの普遍性を持ち込むような諸カテゴリーにしたがって機能する思惟とが融合されたものである」(ibid.) とする学説に委託するほかなくなっているのだという。これに対して、ホワイトヘッド自身はこの「単純な生起」という考えを拒否する。そしてホワイトヘッドは、一切の現実的生起(現実的存在)はその過去に順応する (conform) と考える。つまり、ホワイトヘッドにとって現在の出来事と過去の出来事が因果的な関係性をもつのは、そのような規定が外から世界に投げ入れられるためではなく、世界そのものが内蔵している順応という原理によるのである。このように、ホワイトヘッドは因果性を自然そのものに内在させる。ホワイトヘッドの言う「単純な位置づけの誤謬」とは、現在が過去に順応するという自然のこの根源的な原理を見落としてしまうことである。

そして、ホワイトヘッドの言う「単純な位置づけの誤謬」は、「過去や未来に関する何らの情報も与えない」(PR p.168) と言われる現前的直接性という知覚様態と密接に関わっている。ホワイトヘッドによれば、カントにとっては(またヒュームにとっても)「現前的直接性が知覚の原初的事実である」(ibid. p.173) という。つまり、カント(やヒューム)はその知覚論において、過去や未来から分断された現在の現れを知覚する現前的直接性だけを認めているために、そのような知覚において捉えられる現れはその過去や未来と関係性を持たない「単純な生起」である他はないということになるだろう。

しかし、ホワイトヘッドによるこうしたカントへの批判は果たして妥当だと言えるだろうか。与件を「単純な生起」とみなすという批判については、確かにカントは「単に知覚によるだけでは、相次ぐ諸現象の客観的な関係は規定されないままに留まる」(KrV B234) と述べ、継起的に知覚された諸表象同士による限りでは、それらの客観的な先後関係および因果関係がわからないとはっきり言っている。だが、あくまでここで言われている諸現

象の関係とは、表象としての関係であるということに注意が必要である。カントは決して諸事物それ自体の間には何の関係性も存在しないと主張しているわけではない<sup>9</sup>。たとえばカントは「太陽が石を照らすと、石は熱くなる」という命題を、まだ客観的な必然的結合をもたない知覚判断の例として挙げている（Prol p.66, Anmerkung）。だがこれは、「太陽の光」と「石」という二つの実在の間には実際には何の関係性も存在せず、主観が認識においてこれらに原因と結果というカテゴリーを与えることによって初めてこの二つの実在が関係をもち始めるということが主張されているのではない。そうではなく、太陽が石を照らしているのを見るという知覚と、その石に触れてみたら熱さを感じたという知覚を単に結びつけただけのこの知覚判断が、当該の主観にしか妥当性を持ち得ないというに過ぎない。因果性のカテゴリーを介在させなければならないのは、この判断があらゆる主観一般に妥当する客観性をもった経験判断になるために必要であるというだけなのである。むしろカントは「その前に何らの物の状態が先行しないような生起 [Entstehen] は…把握され得ない」（KrV A191/B237）とすら言っている。しかも、それに続けて「したがって、ある出来事の把握は総じて、ある知覚に続いて起きた別の知覚である」（*ibid.*）と言っており、この言葉からすれば、カントの知覚論が、過去に何の関わりももたない知覚様態である現前的直接性だけを認めているというホワイトヘッドの批判の妥当性も疑わしい。このように、ホワイトヘッドが批判対象とするカントは、ホワイトヘッドによってかなり偏ったかたちで描かれてしまっているように見える。

だが、たとえそうだとしても、このカント批判を通してホワイトヘッドが強調したい点は、カントの哲学体系そのものを批判すること自体とは別のところにあると解釈すべきなのではないだろうか。その強調点とは、あらゆる経験の根底には他の現実的存在への物的感受があること、つまり、それが単なるセンスデータないしは観念の集合体ではなく、現実世界において存在をもつ実在によって確かに構成されているとする「改善された主観主義原理」の主張である。ホワイトヘッドは、現前的直接性をもって知覚される現れが目でもって見られていること、またそれが知覚者の現実世界に存在する結合体（たとえば石、単なる石の像ではない実在としての石）によるものであるということを確認する。つまり、現前する現れという経験が、知覚者自身の身体という結合体における生理的過程や、実際に見られる対象としての結合体、あるいは知覚対象を見ることを可能にする条件を作っているその他の結合体（たとえば光子など）への順応による帰結であるということである。この実在からの順応という側面から知覚を考えたものが、因果的効果という、ホワイトヘッドが現前的直接性よりも根源的だと主張する知覚様態に他ならない。ホワイトヘッドの知覚論においては、人間の知覚が、因果的効果と現前的直接性の混合である象徴的関連付けという様態であることを強調することにより、「改善された主観主義原理」が具現されていると考えられる。

<sup>9</sup> むしろそのような主張をすれば、物自体の性質について言及してしまうため、カント自身の超越論的観念論という立場を侵害することになるだろう。

## むすび

有機体の哲学がカント哲学の逆転であるというホワイトヘッドの言葉から、時空や因果性の概念がカントの認識論におけるのとどのように異なり、「逆転」されているかを考察してきた。さて、延長的関係という時空的秩序の図式が与件であり、因果性は順応という自然の根本原理であるとする有機体の哲学の考え方を見てみると、有機体の哲学の考え方は、まさにカントが自らの「超越論的観念論」に対置させて批判した「超越論的実在論」の考え方に近づいているように思える。超越論的実在論とは、経験される対象は物自体であり、対象から把握されるその諸性質や対象同士の関係はすべて対象自体に属するとする考え方である。それに対してカントは、対象の諸性質および諸関係は主観の認識能力に依存するとする超越論的観念論を提示する。この超越論的実在論から超越論的観念論への転換がいわゆる「コペルニクスの転回」の要であるが、有機体の哲学はそれをさらに「逆転」していると言ってもいいかもしれない。しかしながら、それは超越論的実在論への単純な回帰を意味するわけではないのは明らかである。その理由としては、第一に、ホワイトヘッドは空間と時間がそれ自体で実在するとは考えていないことが挙げられる（本発表2-1で述べたように、延長連続体は潜在的である）。第二には、ヒュームなどの、（カントによれば）超越論的実在論の前提にたつ哲学を、ホワイトヘッドが批判しているということも挙げられるだろう。では、有機体の哲学はどのような形でオリジナルの超越論的実在論とは異なっており、その欠点を乗り越えているのだろうか。残念ながらこの問題をここで詳細に論究することは叶わないが、論者の今後の研究課題として提示しておくに留めたい。

## 引用文献

- Allison, E. Henry (2004), *Kant's Transcendental Idealism*, revised and enlarged edition, New Haven and London: Yale University Press.
- Shaviro, Steven (2009), *Without Criteria: Kant, Whitehead, Deleuze, and Aesthetics*, Cambridge and London: MIT Press.

## A. N. ホワイトヘッドの「延長抽象化の方法」における「測量」の含意

遠藤正水

A. N. ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead, 1861-1947)の「延長抽象化の方法(method of Extensive abstraction)」について、C. D. ブロードは、「知覚できたりまさに知覚したりはするけれども数学的に処理できないこと、と、数学的に処理できたりまさに処理したりはするけれども知覚できないこと、との間の精確な連関」(1)を与えるところにその要諦を看取している。たしかに、この方法は、知覚に直接与えられている「出来事」や「持続」を対象項として、その「出来事(event)」や「持続(duration)」の有する「延長(extension)」という論理的属性を制限していくことで、点や線、平面などの幾何学的な「抽象的実体(abstract entity)」およびそれらの諸関係などの被定義項を与えていく方法である。だから、ブロードの指摘は、相対性理論に経験論的基礎付けを与えるようとするホワイトヘッドの意図を巧みに汲み取っている。

ところで、「延長抽象化の方法」によって構築されようとする幾何学には、「測量(measurement)」のための「合同(congruence)」という「抽象的実体」間の関係が含まれなくてはならない。これを処理するためにホワイトヘッドは、「知覚しつつある出来事(percipient event)」と「持続」との「現在-ここ」という関係を取り上げ、この関係を「共成(cogredience)」と名付けている。「共成」によって、一つの「時間系(time-system)」における「絶対位置(absolute position)」の意味が与えられ、しかも、「時間系」に属する「瞬時空間(instantaneous space)」間に認められる様々な関係が「合同」を論じるために露にされる。

しかし、近年のP. サイモンズやC. カサッティとA. C. ヴァルジなどの提唱しているメレオロジーやメレオトポロジーの観点から「延長抽象化の方法」を解釈する試みでは、たしかにこの方法の論理的な問題点を明晰にしたりできる(2)けれども、「計量幾何学(metrical-geometry)」の構成で果たされる「共成」の意義や幾何学的な「抽象的実体」の階層性が取りこぼされているように思われる。

そこで、本発表では、まず、「延長抽象化の方法」の経験論的な目論見を確認し、「共成」によって理解される「合同」に焦点を絞って、「延長抽象化の方法」における「測量」の含意を闡明したい。

## 第一節 「延長抽象化の方法」の目的

ホワイトヘッドは「自然科学では、「説明すること」が意味するのは、単に「諸々の内的結合(interconnexion)」を発見することである」(CN97)と述べて、科学における「説明」とは「内的結合」の発見に他ならない、と断言している。この際に、何と何とが内的に結合しているのかと言えば、「…自然という具体的諸事実は諸々の出来事であり、諸々の出来事

は、それらの相互関係におけるある一定の構造とそれら自身の有する一定の諸特徴を提示する (exhibit) (CN166)とホワイトヘッドは述べているから、ある「出来事」とある別の「出来事」とが「内的結合」している。しかも、その「内的結合」は「出来事」間の相互関係における構造とその特徴によって表現される。すると、ホワイトヘッドにおける自然科学における「説明」の目的は、「説明」されるべきなんらかの構造とその特徴とを「出来事」と関連付けて表現するところにあると言える。ところで、ホワイトヘッドが「出来事」で成立している顕著な構造としてあげるのは「時空構造(spatio-temporal structure) (CN173)であり、この「時空構造」を表現する幾何学を「延長抽象化の方法」で構成しようとしているのは、つとに有名である。したがって、「延長抽象化の方法」の目的は、「時空構造」とその特徴を「出来事」と関連付けて表現するところにある。それでは、「延長抽象化の方法」はどのようにして「時空構造」を表現する幾何学を構成していくのか。

上述したように、「延長抽象化の方法」が適用されるのは、「直接的に知覚される場」である「出来事」である。この「出来事」の有する根本的な属性には、時間的な「推移(passage)」と空間的な「広がり(extent)」があり、この二つの属性に共通する論理的属性として、「延長」が抽出される。ホワイトヘッドによれば、「延長」という関係を有する「出来事」は「複雑な事実であり、二つの出来事間の諸関係ははかりしれない迷宮を形成している」(CNp.78)。しかし、ホワイトヘッドによれば、「延長抽象化の方法」によって、こうした「出来事」が孕む複雑な「内容」から単純性へと接近する(PNK p.76)ことが可能である。たとえば、目の前にある机という「出来事」を考えてみよう。次にこの机の「広がり」の右側を考え、この右側の広がりの下側を考えていく。すると、この手続きを繰り返すことで、この机の右下のある一点へと「広がり」は縮まっていく。理想的に到達されるはずのこの点のことをホワイトヘッドは「出来事粒子(event particle)」と呼ぶ (cf. PNK18.3)。すると、「この机全体」から「机の右側」へ、そして、「机の右側の下側」へ…と、「内容」を有する「出来事」の集合は「右」や「下」という属性を次第に小さくしていき、理想的には「広がり」のない「出来事粒子」へと至ると、それは一般に点とよばれる、幾何学的な「抽象的実体」と同じ機能を果たす。つまり、こうした手続きは、幾何学な「抽象的実体」を直接経験されている「出来事」と関連付けることで、その意味を決定しているのである。しかもその際に、例えば、右下の「出来事粒子」と右上の「出来事粒子」とは右下の「出来事粒子」と左下の「出来事粒子」よりも離れているように、「抽象的実体」の意味を決定するばかりでなく、「抽象的実体」間の関係に関しても「延長抽象化の方法」は説明することになる。

約言すると、「延長抽象化の方法」の目的とは、まず、知覚に直接与えられている「出来事」を対象として、直接的に経験される「出来事」の有する「推移」と「広がり」の関係である「延長」を制限していくことで、点や線、平面などの幾何学的な「抽象的実体」の意味を決定し、しかも、「抽象的実体」間に成立する関係を構成するところにある。

## 第二節 「延長抽象化の方法」で構成される二つの「空間」概念

ホワイトヘッドによる「延長抽象化の方法」は、点や直線などの幾何学的な「抽象的実体」を、「出来事」とか「持続」とかと関連付けてその意味を説明する方法である。ところで、「抽象的実体」とその関係が示す空間に関して、ホワイトヘッドは『自然という概念』では、少なくとも二つの「空間」概念を分けて論じている。その二つとは「瞬時空間」と「時間なし空間(timeless space)」である。「延長抽象化の方法」における幾何学的な「抽象的実体」間の関係の構成手続きを理解するために、本節では、このふたつの「空間」概念について簡潔に確認しておきたい。第一節で論じたように、「延長抽象化の方法」では、科学的説明において、説明されるべき概念は「出来事」との関連が示されなくてはならない。したがって、「瞬時空間」と「時間なし空間」について、「出来事」との関連から考察を始めることにしよう。

ホワイトヘッドによれば、ある一つの「出来事」が感知される際には、「出来事」の有する「延長」という論理的属性のために、当該の「出来事」以外の「出来事」もまた成立していると考えられる。例えば、「この部屋の中の出来事」は「この建物の中の出来事」に延長されている。ただし、「この部屋の中の出来事」はその特徴が認知可能ではあるけれども、その「出来事」と「延長」関係にあるだけの「出来事」の特徴、例えば「別の部屋の出来事」の特徴が認知可能であるわけでは、もちろんない。しかし、「出来事」の有する「延長」関係には制限がないから、ある一つの「出来事」の感知は、その「出来事」を含む「全自然」の感知ともなる、とホワイトヘッドは論じる(cf. CN49)。この「全自然」とは、ホワイトヘッドによれば、「時間的厚み(temporal thickness)」を有する「持続」と呼ばれるものである。

ある「持続」は、それを含む「持続の族」を形成し、その時間的な側面をホワイトヘッドは「時間系 (time-system)」と表現する。対して、一つの「持続」には「時間的厚み」があるけれども、この「時間的厚み」を狭めていくことで「瞬時の全自然」である「瞬間(moment)」が構成される。この「瞬間」の空間的側面を表現しているのが、ホワイトヘッドが「瞬時空間」と呼ぶ「空間」概念である。ホワイトヘッドによれば、この瞬間に「私達が見ていると理解している空間は瞬時空間である」(CN177)。ただし、ホワイトヘッドは「瞬時空間」内にある「抽象的実体」を点や直線ではなく「瞬時点(punct)」と「瞬時直線(rect)」と名付けている。というにも、一般的に科学で用いられる概念としての点や空間は、「時間なし空間」における「点(point)」や「直線(straight line)」であるからである。それでは、物理学で用いられているという「時間なし空間」とはどういった「空間」概念であるのだろうか。

「瞬時空間」は、一つの「時間系」における「瞬間」の空間を表現するための「空間」概念であった。ところで、一つの「時間系」では、ある「瞬間」は別の「瞬間」へと移行する。その際に、「瞬時空間」は、一つの「瞬間」の空間的側面であるので、「瞬間」の移

行にともなって、その都度新たに構成されるものである。すると、「時間が進むにつれてそうした諸空間（瞬時空間）からなる連続的継起(succession)を観察」(CN177)することになる。したがって、そのようにして構成される諸々の「瞬時空間」の集合を考えることができる。そこで、「時間なし空間はすべてのこうした瞬時空間をともに括る(string together)ことによって到達される」(CN177)のである。つまり、「時間なし空間」は、一つの「時間系」における諸々の「瞬時空間」からなる集合を表現する「空間」概念である。しかも、ホワイトヘッドは、「二つの時間系 $\alpha$ と $\beta$ とを考察しよう。それぞれには、それ自身の時間なし空間と…が伴っている」(CN117)とも記述しているから、「時間なし空間」は、唯一の空間でもなければ、様々な「時間系」の相関表現でもなく、一つの「時間系」に一つ構成される「空間」概念であることがわかる(3)。

### 第三節「延長抽象化の方法」において「共成」が導入されるタイミング

ホワイトヘッドは、「延長抽象化の方法」で「空間」概念を示すために構築される「幾何学」に関してこう述べている。「幾何学の諸公理についての現代的な諸解説(exposition)では、諸線分間の合同関係が満たすべき一定の諸条件が規定されている(lay down)。私たちには点とか直線とか平面とか点間の順序(order)とかについての完全な理論がある、と想定されている。実際のところ、私たちには非計量幾何学(non-metrical geometry)についての完全な理論があるのである。それから次に、私たちは、合同に関して探究し、この関係を満たす…諸条件からなる集合を規定するのである」(CN121)。すなわち、第二節までの考察を踏まえると、「延長抽象化の方法」では、「点」とか「直線」とかの「抽象的実体」の意味を、「出来事」とか「持続」とかに関連付けて説明している。しかも、この方法の詳細を追うと、その「抽象的実体」間の関係である「順序」については、「延長」という論理的属性によってのみ説明されている(4)。すると、「延長抽象化の方法」では、「延長」という論理的属性によって構成される「幾何学」は、「抽象的実体」間の「順序」のみを扱う「非計量幾何学」である。しかし、ある点と別の点との間の距離の量的な違いや交差する二つの直線における角度の量的な違いなどの、「測量」を説明できなくては「物理学で用いられる空間」とは言えないので、そうした量的な違いを「出来事」との関連に立ち返って説明しなくてはならない。

ホワイトヘッドによれば、そうした量的な違いはその距離や角度の「測量」する経験に訴えかけることはできない(cf. CN142)。というのも、「測量の手続き」のためには「変化」することのない基準(例えば、ヤード度量器)を繰り返し使うことが必要となるけれども、その使用ごとにその基準は自ら自身と「合同」でなければならぬからである。すなわち、「測量」という経験は、「合同」という幾何学的概念の認知が先んじているのである。それでは、「合同」という幾何学的概念は、「出来事」や「持続」のどのような側面と関連するとホワイトヘッドは考えているのか。「合同」という関係を説明するためにホワイトヘッド

が取り上げるのは、「運動(motion)」という「事実」である。すなわち、「運動は物理的な事実である。運動は、私たちが自然の中にあるものとして知覚する何ものかである」(CN105)。しかしすぐさま、ホワイトヘッドは、「運動は静止(rest)を前提とする」(CN105)とも言う。なぜ、ホワイトヘッドは「運動」と「静止」とを並列して語るのだろうか。それは次のように答えることができるだろう。「運動」は、一般的に言えば、あるときにあそこにあったものが別のときに別のあそこにあるのを意味している。すなわち、「運動」とは、ある「出来事」が、一つの「瞬時空間」で「あそこ」にあり、しかも、その「瞬時空間」と同一の「時間系」を形成しているけれども異なった「瞬時空間」でまた別の「あそこ」にある、ということである。ところで、ある「瞬時空間」での「あそこ」とか別の「瞬時空間」の「あそこ」とかの意味は、二つの「瞬時空間」で変わることのない「ここ」という観点抜きには意味をなさない。だから、「運動」という「事実」は、一つの「時間系」における二つの「瞬時空間」での変わることない「ここ」があるという意味で、「静止」が前提されるのである。

しかし、この「静止」という「事実」を十全に語るために、「絶対位置(absolute position)についての理論をある意味で認めることなく、あなたは静止についての理論を持つことができない」(CN105)とホワイトヘッドは指摘している。この「絶対位置」についての理論を提供するのが「知覚しつつある出来事」であるのだが、なぜ「静止」についての理論と「絶対位置」の理論とを並列してホワイトヘッドは考察ののだろうか。

ホワイトヘッドによれば、「知覚しつつある出来事」とは「知覚のためのわたしたちの観点(stand point)」(CN p.187)である。ある「出来事」はある観点から感知されているという「事実」の指摘は、ホワイトヘッドにとって決定的である。なぜなら、その「事実」こそが「持続」の規定を豊かなものとするからである。すなわち、ホワイトヘッドは「持続が感覚感知にとって現在として措定されうるのは、持続が知覚しつつある出来事との関係で「ここ」についての一つの壊れることのない意味を与えるという条件に立って、である」(CN110)。この文言からすると、「持続」を規定する「現在」は「ここ」によって特定された「現在」として明確に捉えられ、しかも、「ここ」を規定する「観点」が「持続」になれば、そもそも当該の「持続」は規定できない。つまり、「持続」を規定するのは、何らかの「知覚しつつある出来事」との「現在-ここ」という関係なのである。こうした「現在-ここ」という関係の有する論理的属性を、ホワイトヘッドは「ある出来事は、関連付けられた持続内で紛れもないここ(unequivocally here)において知覚しつつある出来事であるという属性があるとき、当の持続と『共成』であると述べることにしよう」(PNK p.70)と述べて、「共成」と名付けている。しかも、ホワイトヘッドにしたがえば、ひとつの「持続」は、様々な「知覚しつつある出来事」と関係を有している可能性がある。すると、別の「知覚しつつある出来事」は、「ここ」という関係を有する「知覚しつつある出来事」に対して、当の「持続」を媒介に「そこ」という関係を示すことになる。別言すれば、ひとつの「持続」と「共成」的な関係にある様々な「知覚しつつある出来事」のうちのひとつ



を「ここ」として固定すれば、当の「知覚しつつある出来事」と別の「知覚しつつある出来事」との関係は、その「持続」の中で「そこ」という関係として定まる。

したがって、「共成」は、ひとつの「持続」における「瞬時空間」の「ここ - そこ」という空間的位置を決定する関係でもある。上述したように、この関係を説明する手続きでは、同じ「時間系」にある他の「瞬時空間」とか別の「時間系」にある他の「瞬時空間」とかは用いられておらず、「ここ - そこ」という関係は、他の「瞬時空間」とは無関係に確定される。つまり、「共成」は、一つの「瞬時空間」における「ここ」を規定するから「静止」という「事実」を示し、しかも、他の「瞬時空間」や「時間系」とは無関係に「ここ」を規定するから「絶対位置」を説明する関係なのである。

#### 第四節 「合同」概念から見て取れる「延長抽象化の方法」の手続き的含意

「絶対位置」を「持続」と「知覚しつつある出来事」との「共成」関係によって説明して、ホワイトヘッドは、「合同」という幾何学的概念を説明するために、「停留点(station)」という概念を導入する。「停留点」とは、一つの「時間系」にある、ある「瞬時空間」の「瞬時点」 $a$  と別の「瞬時空間」の「瞬時点」 $b$  とがそれぞれ、「現在 - ここ」という「共成」関係にある場合に、同じ「ここ」( $a=b$ )として成立しているような「抽象的実体」である。つまり、「停留点」とは、一つの「時間系」での「時間なし空間」における点を意味する「抽象的実体」である。しかも、この「停留点」という「抽象的実体」は、別の「時間系」における「直線」という「抽象的実体」の定義ともなる、とホワイトヘッドは述べている。すなわち、多少長くなるけれども引用すると、「 $\alpha$  [一つの特定な時間系] に属する継起的瞬間で、その瞬間が  $\alpha$  に属する一つの所与の点と交差するところの出来事粒子にいるある人は、時間系  $\alpha$  の時間なし空間で静止していることになる。しかし、別の時間系に属する、何らか他の時間なし空間では、彼は、その別の時間系に属するそれぞれの継起的瞬間で異なった点にいることになる。言いかえれば、彼は運動しているのである。彼は等速度 (uniform velocity) である直線上で運動していることになる。私たちはこれを直線の定義としてもよい。すなわち、時間系  $\beta$  の空間での直線は、 $\beta$  の次のような諸点の軌跡 (locus) である。すなわち、ある他の時間系の空間にある一つの点で一つの点跡とすべて交差している  $\beta$  の諸点、がそれである」(CN114 [ ] 内は訳者による補足)。この事情を理解するために、ホワイトヘッドが与えている次の例で考えてみよう (cf. CN175)。地球上で「机の右下の角」を眺めている私がおり、火星上で「その右下の角」を眺めている何かの別の生物がいるとしよう。ただし、私という人間と別の生物との比喩は便宜上のものである。この際に、私が属している一つの「時間系」 $\alpha$  での「時間なし空間」では、その「右下の角」は変化することのない一点である。つまり、一つの「時間系」における「停留点」である。ところが、私と火星人とがそれぞれに対して等速で運動しているから、火星人が属している「時間系」 $\beta$  での「時間なし空間」では、その「右下の角」は点、ではなく、「軌

跡」、すなわち、当の運動に沿った線であることになる。この場合では、私から見る点は火星人間にとっての曲線であるように思われるけれども、火星人間の「時間なし空間」では、私の「時間なし空間」にあるすべての「抽象的実体」が当の運動に沿った等しい曲率をもつ「抽象的実体」となるから、当の曲線と思われる「抽象的実体」を火星人間にとっての「直線」と定義することが可能である。こうして、一つの「時間系」における「停留点」は別の「時間系」における「直線」を定義することになるのである。

こうした「停留点」と「直線」の定義から見て取れることは、等速度運動をしている二つの「時間なし空間」にある様々な「抽象的実体」間の関係性を表現する仕方であり、その関係性の中でも「合同」概念を説明するために顕著に働くのが「垂直性」という関係性である。すなわち、「 $M[\alpha]$ に属する瞬間」に属する瞬時空間では、瞬時平面 $\lambda$ は、 $M$ での $\beta$ の方向と垂直である。しかも、 $N[\beta]$ に属する瞬時空間では、瞬時平面 $\lambda$ は $N$ での $\alpha$ の方向と垂直である。これが、垂直性についての定義を形成する基本的属性である。垂直性の対称性 (symmetry) は、二つの時間系間の相互関係にある垂直性の特定の例である」(CN118 [ ]内は訳者の補足)。垂直性という関係性から、一つの「時間系」における「時間なし空間」で、ある平行四辺形が構成できる。この平行四辺形の対辺が合同であると約定することで、ある「時間系」における「時間なし空間」間における「抽象的実体」間の「測量」が可能となり、しかも、他の「時間系」における「抽象的実体」の関係の「測量」間の関係も説明できるようになる。様々な「時間系」における「時間なし空間」に対して、それぞれに「計量幾何学」を構成した後始めて、「こうした (合同の) 公理によって、一つの時間系でなされた諸測量を別の時間系でなされた自然にある同じ事実の諸測量と変換するための公式が演繹されうる」(CN113)。すなわち、ある「時間系」における「測量」を、ほかの「時間系」における「測量」へと変換する運動方程式の考察が可能となるのである。

おわりに

本発表では、まず、「延長抽象の方法」の説明の含意を明らかにし、次に「延長抽象化の方法」で取り扱われる二つの「空間」概念を確認した。そうした「空間」にある「抽象的実体」の構成において、「延長」という属性のみでは「計量幾何学」が構成できないことから、「計量」を定めるための「測量」および「合同」という幾何学的概念の経験的な由来について問い、それが「運動」という「事実」に基づく「共成」という論理的属性にあることを確認した。最後に「合同」概念の構成の詳細をみることで、複数の「時間系」における「時間なし空間」にある「抽象的実体」間の関係がどのように比較可能となるのかについて考察を加えた。

本発表の論考から理解できるのは、「延長抽象化の方法」における「計量幾何学」の構成では、「複数の時間系」の存在とそれぞれの「時間系」が「等速運動」しているという「一

様性」とが仮定されている、ということである。特に「一様性」という考えは、中期自然津辰学の三部作後の論文である「一様性と偶然性」において、ホワイトヘッドが「因果性」に関するヒューム批判の鍵概念としてあげているものでもある。複数の「時間系」と「一様性」の仮定が単なる論理的な仮定であることはないはずだけでも、「事実」として「感覚感知」にいかように把握されるのか、については今後の課題としたい。

註

A.N.ホワイトヘッドの著作については、引用および参照に関する注記のすべてを、以下の略記を用い、その後ろに頁数を付けて本文中に挿入する。略記については以下の通りである。

CN : A.N.Whitehead, *The Concept of Nature*, The Cambridge University Press, 1955 (first edition published in 1920) .

PNK : A.N.Whitehead, *An Enquiry Concerning The Principles of Natural Knowledge*, The Cambridge University Press, 1955(second edition published in 1925).

(1) C. D. Broad, *Scientific Thought*, Routledge, 1923, p.49.

(2) 例えば、カサッティとヴァルジは、中期自然哲学での「延長」から『過程と実在』での「結合(connection)」への移行について、「延長」による「結合関係」の定式化の不備ゆえを示し、適切なトポロジー的な原初概念によってメレオロジーを定義しようとするホワイトヘッドの方針について指摘している。cf. R. Casati and A. C. Varzi, *Parts and Places*, MIT Press, 1999, pp.11-16.

その他に、ボストックは、『過程と実在』では「延長」による「部分関係」を真部分集合に限定して定義しているにもかかわらず、結合性の前提からは、「部分関係」は非 - 真部分集合を含んでいると指摘している。cf D. Bostock, 'Whitehead and Russell on Points', *Philosophia Mathematica* vol.18(1), 2010, p.9.

(3) こうした考察を踏まえると、パルターが「時間なし空間」を「三次元空間」だと述定しているのは誤りを導きやすい表現であると言える。というのも、「時間なし空間」は一つの「時間系」にある「瞬時空間」の集合に対応した「空間」概念であるので、座標表記しようとする三つの空間的の測度と一つの時間的な測度で表わされる「空間」概念であるからである。cf Cf. Palter, R.M. *Whitehead's Philosophy of Science*, The University of Chicago Press, 1970, pp54-55.

(4) 「延長抽象化の方法」では、「延長」のみで「瞬時空間」の「順序」の構成されていることについては、次の拙論を参照してください。「A. N. ホワイトヘッドにおける「相対性」について」、『哲学論究』第 21 号、2007 年。

有機体の哲学の〈発生〉

— 『過程と実在』における経験論的な原理の効果について—

飯盛元章(中央大学・院)

## ホワイトヘッド哲学における二元論<sup>1</sup>

中央大学大学院 博士後期課程 清水友輔

### はじめに

ホワイトヘッドが二元論 (dualism) を拒否しているという見解は、誤りを含んでいる。たしかにホワイトヘッドは、デカルト的二元論を批判している。しかし、それがどのような観点からの批判であったのかに注意を払わねばならない。詳細を見ていくと、ホワイトヘッドの批判は「二元論一般」に向けられているのではないことがわかる。それどころか、ホワイトヘッドは二元論を積極的に主張しさえする。じっさい、のちに見るように、彼は二元論の擁護者を自称し、自らの宇宙論を二元論的であるとさえ述べるのである。これは単なる矛盾であり、首尾一貫性のない気まぐれな主張なのだろうか。

この問題に関連して、次の三つの点を明らかにすることが本稿の目的である。すなわち、①ホワイトヘッドが自身の宇宙を二元論的であると主張するさいの二元論の意味 (第1節)、②「現実的存在」の基本的な性格によってホワイトヘッド的二元論が不可避免的に要請されているということ、またその二元論がはらんでいる困難 (第2節)、③その困難を体系内でいかに解決しうるかということ (第3節)、である。

### 第1節：ホワイトヘッド的二元論

「ホワイトヘッドは二元論者である」という主張は、妥当性を欠いたものだと思われるかもしれない。というのも、ホワイトヘッドは次のようにデカルト的二元論を批判しているからだ。

「デカルトの哲学では、もっぱら物質的な一実体からなる世界がなぜあるべきではないのか、あるいは、もっぱら精神的な一実体の世界がなぜあるべきではないのかということについての理由がない。デカルトによれば、実体的個体は「存在するためにそれ自身以外の何ものをも必要としない」のであるから。」(PR 6)

<sup>1</sup> ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead)の著作は引用に際して以下のように略記し、該当するページ数を付記する。書名のあとの( )内は最初に出版された年を表している。引用文中の傍点は、とくに断りがなく原文でイタリック表記された語句である。また、[ ]は引用者による補足を、……は引用者による省略を示す。なお、引用に際しては既存の邦訳を参照させていただいたが、地の文との兼ねあいなどの理由から適宜変更を加えた。

PR: *Process and Reality* (1929), Corrected Edition, New York: Free Press, 1978. (『過程と実在』山本誠作訳, ホワイトヘッド著作集第10・11巻, 松籟社, 1984年)

AI: *Adventures of Ideas*(1933), New York: Free Press, 1967. (『観念の冒険』山本誠作・菱木政晴訳, ホワイトヘッド著作集第12巻, 松籟社, 1982年)

相反する性格をもつ存在者が、それぞれ単独で成立する実体であるなら、両者ともが必要な理由も、両者が関係することの理由も与えることはできない。デカルトの説では魂と物体がなぜ結びつくのかを整合的に説明できないのだ (cf. AI220-221)。たしかに、ここでホワイトヘッドはデカルト的二元論を批判している。

しかし、「なににかんして」二元論が批判されているのかという点に注意しなければならない。ホワイトヘッドは、事物のうちに対立する二元論的な性格があるということを批判しているのではない。上で批判されているのは、二元論的な対立物を、それぞれ単独で成立する実体として扱ってしまうことなのである。対立する二項を、それぞれ単独で成立している実体とみなすことは、具体的な事実からその一面だけを切り取った抽象であるとみなされる。この切り取りは「二元分裂 (bifurcation)」(PR289-290) と呼ばれ、二元論一般とは区別される。「二元分裂」は、実際には抽象によってなされた分離を、あたかも事実における分離だとみなす点で、「具体的なものを取り違える錯誤 (fallacy of misplaced concreteness)」(PR 7) の一種である。この錯誤のゆえに「もろもろの「二元分裂」は納得のいく宇宙論をめざす上で致命的」(PR290) なのであり、ホワイトヘッドはデカルト的二元論を拒否するのである。つまり、ホワイトヘッドが批判しているのは「二元分裂」であって「二元論そのもの」ではないのだ。

じっさい、ホワイトヘッドは自身の哲学的立場を「皮相的には二元論批判の一例」(AI190) になっているものの、「別の意味では……二元論の擁護を提唱しようと努めてきた」(ibid.) ものであると述べている。

「後期プラトン対話篇における、プラトンの「魂」とプラトンの「物理的」自然とのあいだの二元論、デカルトの「思惟する実体」と「延長をもった実体」との二元論、……これらすべての類似する二元論は、現実態の各生起(occasion of actuality)のうちに見出される。それぞれの生起はその物理的継承と、それを自己完成へと駆り立てる心的反作用とをもっている。世界は、たんに物理的でもなく、たんに心的でもない。また、それはたんに多くの従属相をともなった一でもない。また、それは変化の幻想を伴った、本質においては静的な、たんなる完結した事実でもない。悪しき二元論がどこに現れようとも、それは抽象を最終的な具体的事実 (concrete fact) と取り違えるがゆえである。」(AI190)

世界には二元的な対立の一方だけがあるのではなく、どちらともがある。そのとき、対立の両項がそれぞれ独立したものとみなされるなら、そのモデルは「悪しき二元論」として批判されることになる。というのも、「現実的存在 (actual entity)」はもっぱら物的であることも、もっぱら心的であることもない（ここで物/心の対立を挙げているのは、たんに上の一例としてである）からだ。「現実的存在」とは、ホワイトヘッド宇宙論における存在者

の究極的な単位であり、もっとも「具体的な事実」のことである。物性や心性といった性格は、個々の「現実的存在」から一性格だけを抽象したものであって、事物の具体的なあり方においてはそれらの性格は独立していない。それゆえ、対立の両項を独立した実体であるとするのは、本来生じていない分裂を事実を持ち込む錯誤なのである。これは先述した「二元分裂」の考え方である。このように、ホワイトヘッドが批判しているのは「二元分裂」を主張する「悪しき二元論」だけなのだ。

ところで、「二元分裂」を避けるのであれば、選択肢のひとつとして一元論の立場が考えられるはずである。しかし、ホワイトヘッドはこの立場を採らない。「悪しき二元論」に対する批判においてホワイトヘッドは、宇宙を構成する具体的な事実がもっぱら物的であることも、もっぱら心的であることも否定した。このことによってホワイトヘッドが主張するのは、具体的な事実は「心的でも物的でもある」ということなのである (AI190)。したがって、どちらか一方に他方を還元することも、「心的でも物的でもない」第三項によって二元的な性格を解消することも、認められない。このとき、「心的」と「物的」という対立は一例にすぎない。

「宇宙は、それ自身のうちにあるさまざまな対立するもの (opposites) についての自発的な自己表現を達成していると解されるべきである。……これら「対立するもの」はすべて、事物の本性における要素であり、度し難くそこに存在している。」 (PR350)

対立が解消されずに「度し難く存在する」ということは、ホワイトヘッドによれば現実的存在という「事物の本性」に属している。したがって、二元論的な対立を無化してしまうような一元論は、「事物の本性」を損なうゆえに採ることができないのだ。

こうして、ホワイトヘッドは「二元分裂 (悪しき二元論)」でも一元論でもない、ホワイトヘッド的二元論を主張することになる。ホワイトヘッドの体系はいかなる意味で二元論であるのか。彼が具体的に述べている箇所を引こう。

「宇宙は、もっとも充実した意味で、無常であるとともに永遠であるから、二元論的である。宇宙は、それぞれの最終的な現実態が物的であるとともに心的であるから、二元論的である。宇宙は、それぞれの現実態が抽象的性格を要求するから、二元論的である。宇宙は、各生起がその主体的形式の直接性を客体的他者性と結合するから、二元論的である。宇宙は、多くの最終的な現実態—あるいはデカルトの言葉でいえば、多くの「真なる事物 (res verae)」—に全的かつ完全に分析することができるゆえに、「多」である。宇宙は、宇宙がひとつの現実的存在に内在するがゆえに、「一」である。こうして、統一性と諸多性とのあいだのこの対比のうち二元論がある。宇宙を貫いて支配しているのは、二元論の根底をなす、もろもろの対立物 (opposites) の結合なのである。」 (AI 190)

ここでは、対応関係や言い換えの関係にあるものを含んだ多くの二元論的対立の組が挙げられている。しかし、本稿でそのすべてを扱うことはできない。対立の組同士が対応関係にあったとしても、ホワイトヘッド独自の概念をそれぞれ論じなければならなくなるためである。したがって、今回は「主体的形式の直接性」と「客体的他者性」の二元論的対立に絞って論じる。「主体的形式の直接性」とは、現実的存在がみずからの生成にあたって働いているときにもつ性格である。そのとき、その現実的存在は自己実現の「主体」であるといわれる (cf.PR25)。他方、「客体的他者性」とは、生成の主体にたいして与えられている与件がもつ性格である。したがって、本稿が扱う二元論的対立は「主体」と「客体」の対ということになる。

ホワイトヘッドの二元論の特徴は、対立している両項が「一方であるとともに他方でもある」という仕方で結合されているところにある。にもかかわらず、それらの対立は「対立」であることをやめない。二つの独立したものへと「分裂」することもなく、対立を解消して同じものになってしまうこともない。対立が対立したまま、それにもかかわらず両立していること。これがホワイトヘッドによって主張されている二元論的宇宙の姿なのである。

この節では、ホワイトヘッドが二元論の批判者であるどころか二元論を積極的に主張していることを確認することが目的であった。また、ホワイトヘッドが批判している「悪しき二元論」や一元論と、ホワイトヘッドが積極的に主張する二元論がどのように異なるのかを見るために、ホワイトヘッド的二元論がもっている一般的な性格について瞥見した。「主体」と「客体」の二元論的対立にかんする具体的な議論については次節で扱う。

## 第2節：ホワイトヘッド的二元論の問題

### 2 - 1. 生成と消滅の対立

本節では、ホワイトヘッド的二元論が内包している問題について論じる。前節で論じたように、ホワイトヘッドが二元論を主張するのは、対立を「二元分裂」へと至らせることも、対立を解消させることも認めないためであった。それゆえ彼の二元論では、二元論的な対立を対立させたままで両立させることが求められる。しかし、対立するもの同士が相容れない性格であるとき、それらを両立させることは単なる矛盾に行き着くのではないか。

「対立の両立」というこの問題は、前節でも述べたとおり、「現実的存在」の基本的な性格によって要請されるものである<sup>2</sup>。「現実的存在」はホワイトヘッド哲学における中心的な概念であるから、「対立の両立」は体系にとって単なる付加的な問題ではなく、不可避の本質的問題なのだ。この問題は「現実的存在」が生成消滅する過程を分析することによって顕在化することになる。したがってまずは、「現実的存在」のあり方がホワイトヘッド二元

<sup>2</sup> 前掲 PR350。「対立するもの」はすべて、[現実的存在という] 事物の本性における要素であり、度し難くそこに存在している」。



論の問題を導く次第を見ていくとしよう。

「現実的存在」は、ホワイトヘッドの哲学的宇宙論における、存在者の究極的な単位 (unit) である (PR18)。その意味で現実的存在は、「有機体の哲学(philosophy of organism)」<sup>3</sup>におけるモナドである(PR80)。しかし、ライブニッツのモナドが運動・変化するのに対し、「現実的存在というモナドはもっぱら生成するだけである」(PR80)と言われる。「変化せずに生成するだけ」とはどういうことだろうか。

「有機体の哲学の形而上学的学説にとって根本的なことは、変化の中の恒常的主体としての現実的存在という観念が、完全に放棄されているということである。」(PR29)

「誰も同じ河に二度入ることはできない」という古代の教えが敷衍される。誰も二度考えることはできない。もっと一般的に言えば、どの主体も二度経験しはしない。」(ibid.)

「変化」にあって存続する主体がありえないため、どんな主体も「二度経験」することはできない。この定式化は単なる宇宙の流動性の強調であり、成否はともあれ流動一元論として容易に解することができる。しかし、ホワイトヘッドの「現実的存在」は、ただ連続的に流動し続けるのではない。それは一回限りの出来事のように、生成しては変化することなく「消滅する(perish)」(PR35)。「ただ生成するだけで、変化することなく消滅する」という観念は、「まず生成して、それから消滅する」という考え方を許容しない。というのも、生成と消滅のあいだには段階的移行が介入する余地がないからである。現実的存在の「誕生は、その終焉なのである」(PR80)という言葉通り、生成と消滅は同時であることになる。あるいはより正確に言うなら、“生成「即」消滅”とでもいうべきあり方をしているのであって、生成と消滅はひとつの同じ事態として実現されるのでなければならない。しかし、生成と消滅を無から生じて無へと帰すことだと考えるなら、それらが順番にではなくいっぺんに起こるということを理解することはできない。それは単なる矛盾でしかない。

現実的存在が消滅するというのはいかなる事態なのか。次の記述が示しているのは、「消滅する」とは無へと帰すことではなく、現実的存在の存在身分の転換を意味しているということである。

「現実的存在は、主体としては「永劫に消え去る」が、客体としては不滅 (immortal) である。現実態は主体的直接性を失う一方で、消滅することにおいて客体性を獲得する。」(PR29)

主体として生成した現実的存在は、みずからを完成することによって生成を終えると、主

<sup>3</sup> ホワイトヘッドは、自身の哲学的宇宙論を「有機体の哲学」(PR29)と呼ぶ。

主体性を失って客体となる。主体としての現実的存在が「消滅する」ということは、主体が客体へと転じるということなのだ。では、主体はなにから生じるのか。現実的存在は、「関連する諸客体から生じ、そして他の諸生起 (occasion) のための客体という身分へと消滅する」(AI177)。「生起」というのは現実的存在とほぼ同義で用いられる概念であるから (PR18)、現実的存在は、客体から生じて主体となり、また主体性を失って客体となるという過程をたどることになる。

したがって、「生成と消滅」という対立は、「主体と客体」という対立へと変換される。日常的な考え方からすれば、生成/消滅の対とちがって主体/客体の対はまだしも両立可能であるように思われる。しかしながら、ホワイトヘッドにおいては、客体とは「潜勢態 (potentiality)」のことであり、主体とは「現実態」のことなのである。潜勢態と現実態とは、一度に両立させようとすれば矛盾にいたるような、相反する性格を有している。すなわち、何が実現するかにかんして潜勢態は「端的な不確定性」(PR212)を示すのに対し、現実態は「完全に確定されている」(PR85)のである。現実態になるということは、主体が自己実現を達成するということである<sup>4</sup>。それゆえ、現実態から主体の実現にかんする「いっさいの不確定性が除去されている」(PR211-212)のは当然だと言える。現実態においては、「潜勢態は実現へと移行してしまっている。現実的生起というのは、いっさいの未決定性を欠いた完結し確定された事実」(PR29)なのである。主体としての現実的存在は、客体である潜勢態から生じる。現実的存在が生じるということは、不確定性を示す潜勢態が、完全に確定された現実態へと転じることにほかならない。こうして、「主体=現実態=完全な確定性」と、「客体=潜勢態=不確定性」とが対立する組になっている。

問題は、この対立する性格を、ふたつの状態の入れ替わりによっては説明できないという点にある。すなわち、現実的存在は「ただ生成するだけ」(PR80)であり、「消滅はするが変化しない」(PR35)のであった。したがって、主体として生じることと、客体へと消滅していくことのあいだには、なんらの中間段階もありえない。現実的存在の「誕生は、その終焉なのである」(前掲 PR80)。生成は即消滅であり、主体は即客体であるとするこの主張によって、「主体性=現実態=確定性」と「客体性=潜勢態=不確定性」とは切り離すことができなくなる。この不可分性は、「主体-自己超越体 (subject-superject)」という概念においていっそう顕在化する。

対立を鮮明にするために、「自己超越体」が客体に属するというを確認しておくとしよう。現実的存在は、自らを実現することにおいてのみ主体たりえるのであった<sup>5</sup>。それゆえ、「自分自身を越え出る過程へと介入するどんな存在も、客体として機能している、と言われる」(PR220)。自分以外の主体の生成過程に寄与する存在は、すべて潜勢態であり、客体である。それだから、「自己超越体」は、その「客体的不滅性 (objective immortality)」

<sup>4</sup> 「現実態はみずからを実現するものであり、みずからを実現するものは何でも現実態である」(PR222)

<sup>5</sup> 「現実的存在は生成するだけ」(PR80)であり、「いかなる主体も二度経験しない」(PR29)。

よってのみ解釈することができる」(PR84)ものとして、潜勢態の性格を示すのである。したがって「主体-自己超越体」は、實際上「主体-客体」を意味している<sup>6</sup>。

「主体-自己超越体」という概念によっては、「現実的存在は自己実現の主体であると同時に (at once)、自己実現された自己超越体でもある」(PR222、強調引用者)と言われるように、「主体」と「自己超越体」とがひとつであるということが最大限強調されている。

「現実的存在は「主体-自己超越体」であり、こうした記述のいずれの面も、瞬時たりとも見逃すことはできないのである。現実的存在がそれ自身の実在的な内的構造に関して考察される場合、たいてい「主体」という用語が使用される。しかし「主体」は、つねに「主体-自己超越体」の略として理解されるべきである。」(PR29)

ホワイトヘッドはこの記述によって、「主体＝現実態＝確定性」と「客体＝潜勢態＝不確定性」との対立を、まさにひとつのものとして理解することを要求している。しかし、「完全に確定されていること」と「不確定性」とのあいだに、いかなる両立がありうるのだろうか。この要求は単なる矛盾に帰着するのではないだろうか。もし矛盾を回避できるとしたら、それは対立する両者のあいだに、段階的な入れ替わり以外のなんらかの関係を結ばせることによってである。なんらの変化も介在しえない生成と消滅のあいだで、言い換えれば「主体-自己超越体」の「- (ハイフン)」において、なにが起きているのだろうか。両者のあいだにあるのはただひとつ、生成がそこにおいて完成する点であり、合生過程の終了をしるしづけている点である。主体は生じることなしには消滅せず、客体にもならない。したがって、いかに「主体-自己超越体」が不可分であろうと、この「- (ハイフン)」としての境界は介在するのだからなければならない。そこに介在するのは、「充足 (satisfaction)」という段階である。

## 2 - 2. 「充足」という「感受 (feeling)」

「主体」と「自己超越体」のあいだで何が起きているかを明らかにするために、本節では「充足」の概念を分析する。「充足」は、合生の説明において次のように位置づけられている。

「合生の過程は、完全に確定した「充足」の達成でもって終わる。そしてそれによって創造性 (creativity) は、他の現実的存在にとっての「与件となる」始原的相へと超え出ていく。そのため、この超越は、先行の現実的存在を完結させる確定した「充足」が達成されるときになされる。完結は直接性の消滅である。」(PR85)

<sup>6</sup> 「主体 - 客体」という表記法によっては、あたかも別々の存在者が主体と客体として対立しているように見えるので、本稿でも用いない。

主体は客体を受感することによって、みずからを形作っていく。この自己形成の過程が合生の過程である。複雑な主体を構成する合生過程においては、初期の単純な感受を与件とする、後期のより複合的な感受がある。より前の感受をより後の感受へと統合していく過程は、「充足」という最終的な統合にいたるまで続く。この「充足」の達成によって合生が完結し、主体がみずからを実現する。したがって、現実的存在は「充足」において「生成」する。しかし、現実的存在が主体として生成することは、同時にその消滅を意味するのであった。主体は消滅することで自己超越体となり、自分以外の主体にとっての客体となる。こうして、主体としての現実的存在は「充足」において「消滅」しもするのである。

「充足」においては、現実的存在が主体として生成することと、客体として自己超越することのどちらもが起きている。しかし、ひとつの現実的存在が二度「充足」することはない。もし「充足」が二つあれば、それはふたつの現実的存在があるということではない。それだから、ひとつの「充足」において、相容れない対立する性格が担わされることになる。「生成」と「消滅」という二項の対立は、「主体-自己超越体」という結びつけられた対立へと置き換えられ、ここでついに「充足」というひとつの事態のうちに移し入れられることとなる。

「充足」に移し入れられたこの対立は、「充足」についてのホワイトヘッドの記述の混乱に見て取ることができる。すなわちそれは、「充足」が主体の合生過程に含まれるのか、それとも含まれないのかという点についての相反する記述である。「充足」には、合生を「最終的に完結させる」という性質上、それが過程の内と外のどちらに属するのか、という問題がある。現実的存在がそこで生じるのだから、「充足」は主体の合生過程のうちにあるのか。あるいは、「充足」において主体は消滅し自己超越してしまうのだから、「充足」は過程を越え出でしまっているのか。

次の記述は、「充足」が主体の合生過程に含まれることを支持するように思われる。

「合生は、「充足」というひとつの具体的な「感受」に帰着する。」(PR42)

「最後の完結した「感受」が「充足」なのである。」(PR283)

二つの記述はどちらも、「充足」が「感受」であると明言している。「感受」とは、客体を主体のうちに統合するはたらきのことである。感受自身も、合生過程において後続するいっそう広い感受によって統合される。したがって、「感受」の定義には、それが「現実的存在の合生における構成要素である」(PR232)ということが含まれている。主体の構成要素となることで、感受はその主体が何になるかを規定している。「その主体」は、「その感受」を含んだものとしてみずからを実現するのだから、感受とその主体とを分離することはできない (PR233-235)。もし、ある感受を主体から取り除いたなら、その主体はみずからを構成している要素を失うことで、別の存在になってしまう。したがって、もし「充足」が

上の記述のとおり「感受」であるならば、それは主体を構成する要素として、合生過程のうちに含まれることになる。

ところが、以下に見るように、「充足」が「感受」であることはありえない。少なくとも、ホワイトヘッドの通常の用法における「感受」ではない。というのも、ホワイトヘッド自身がみずからの記述を真っ向から否定するからである。すなわち、ホワイトヘッドは、「充足」は「合生過程から分離されて」(PR84) いるのであって、「充足」を自身の合生に貢献するひとつの要素として理解することはできない (ibid., 強調引用者) と述べる。この記述は、「充足」とは主体の構成要素となる感受である」という最初の定義とは正反対であり、非合理的な説明であるように思われるかもしれない。しかし、「充足」が合生過程を完結させるものである以上、それを合生に含まれる要素とすることはできないのである。

その理由を述べていこう。現実的存在の合生過程は、主体が感受によって自身に構成要素を加えるかぎり続く。新たな要素が加わることは、その要素を含む主体へと主体を変えることになるからである。自身を構成する要素が変われば、主体は別様に生成する。したがって、最終的な「充足」において合生が完結するのでないかぎり、主体はみずからを現実化できない。生成過程がつづく以上は、なにが実現するかにかんしての不確定性が残っているためである。現実化するということは、いっさいの不確定性を欠いた一個の具体的な事実となることなのである。つまり、「充足」に新たな要素が加わるということは、「充足」が「充足」でなくなるということの意味する。それはもはや合生過程の最終的な完結ではないからである。

「この原理は、絵を見るという例に示されるかもしれない。さまざまな色のパターンがわれわれに与えられている。しかし、余分な赤の一塗り、そのバランス全体を変えてしまう。……現実的存在の最終的な充足は、いかなる付加をも許容しない」(PR45)

もし、「充足」が「自身の合生に貢献するひとつの要素」であるとすると、過程を終わらせるはずの「充足」が、みずからを主体の構成要素として新たに加えてしまい、合生の過程がつづいてしまう。この過程を完結させるには別の「充足」が必要であるが、その「充足」もやはり合生の構成要素となってしまうのだから、合生過程はどこまでも完結することができない。「充足が自身の合生過程に含まれる要素である」という仮定から出発する以上、合生は「充足」を達成できず、したがっていかなる主体も生成することができないのである。

では、「充足」が「感受」であるという記述はなんだったのか。いま、われわれには正反対の二つの記述が与えられている。すなわち、「充足」が合生過程内部の構成要素であるという記述と、「充足」は過程から分離されていて構成要素に含まれないという記述とである。この相反する特徴付けを、ホワイトヘッドの用語法が首尾一貫していないということで片付けてしまっただけでは、「充足」という概念がもっている二重の性格を見逃すことになる。

じっさい、「充足」が完全に合生過程の外にあって、生成する主体から切り離されているということもまたありえない。というのも、合生は「充足」することなしには完結しえないのであるから、「充足」を合生から切り離してしまえば、この場合にもやはり、合生は終わることがないし、主体も成立しえないのである。「充足」が「当の合生の」完結であり、「当の主体の」「充足」でなければ、いかなる生成も不可能である。生成なしにはいかなる自己超越も客体化もありえないのであるから、そもそも合生過程に含まれない「過程の外部」さえ成立することがない。過程が完結し、主体の「充足」が達成されてはじめて、当の合生過程とその外とが分離するのである。それゆえ、「主体の充足 (subjective satisfaction)」(PR52、88)という表現がありうるのだ。

「充足」の概念が「解釈上の重要な問題」<sup>7</sup>であるのは、正反対の定義がどちらも正しいということによるのである。「充足」は過程の最終的な完結であるために、合生の構成要素ではありえない。また、同じく過程の最終的な完結であるために、何らかの意味で合生過程に接している「感受」なのである。「充足」についてのこれら相反する定義は、そのまま「主体-自己超越体」の両義性に対応している。これが本節の立てる仮説である。この仮説の検証と、「充足」が「主体の感受」であるということの意味についての考察は次節でおこなうとして、その前にひとつ別の視点を検討しておきたい。その視点とはすなわち、「充足」というひとつの事態のうちに対立が顕在化するということを深刻な問題として扱わない立場である。

### 2 - 3. ありうる反論 一複数の現実的存在間における、主客の相対性による説明

二元論的対立をめぐる本稿の議論にたいして、以下の反論が提出されうる。

「充足」の両義的な性格が問題であるように見えるのは、一個の現実的存在の生成にかんしてのみ考察しているからである。じっさいには、複数の現実的存在間の関係から考察すべきである。そうすれば、どの現実的存在を主体とみなすかによって、主体と客体の入れ替わりを説明できる。ある現実的存在が主体から客体になるのは、べつの主体によって抱握されることによってなのである、と。

たしかに、この反論の一部はそのとおりである。「相対性の原理 (principle of relativity)」(PR22)によって、どの現実的存在もほかの現実的存在との関係から、客体にも主体にも転じうる。あたかも人称の相対性のように、だれを「わたし (主体)」とおくかによって、だれが「彼/彼女 (客体)」になるかが変わってくる。では、この説明によれば、主客の対立である生成と消滅の対立、現実態と潜勢態の対立、確定性と不確定性の対立とは、具体的な出来事のあり方によってではなく、視点の交換によってすべて説明しつくされるのだろうか。

結論からいえば、この反論は誤りを含んでいる。

<sup>7</sup> Christian, William A. *An Interpretation of Whitehead's Metaphysics*, New Haven: Yale University Press, 1959, p.21

「ある存在 (entity) が経験の過程において客体として機能しうるためには、次のふたつの条件が満たされなければならない。(1) この存在は、先行するものでなければならない。(2) この存在は、その先行性のゆえに経験されるものでなければならない……過程はみずからを創造する。しかし過程は、……客体を創造するのではない。」(AI178-179)

「ある主体からみて他の現実的存在が客体となる」ということの意味は、事実として「他の主体」が先立って生成し終えているということである。主体の合生過程は「客体を創造するのではない」のだから、事実として先行していない現実的存在を、視点の移動によって「客体化」することはできない。真相はむしろ逆であって、ある現実的存在を視点の移動によって客体として扱おうのは、その存在が主体にとって先行している（＝過去から現在へと影響をあたえる潜勢態としてはたらいっている）からなのである。したがって、「先行性」を言うためには、「主体の生成が終わっている」という場面を、それ自体で正当に基礎付ける必要がある。そして本稿が問題にしているのは、まさに「生成が終わる」というこの場面にはかならない。それゆえ、この反論全体は必要な条件を先取ってしまうという誤りをおかしているという点で斥けられる。

### 第3節: ホワイトヘッド的二元論の正当化 —「充足」の二面性と二種類の「切断 (decision)」

視点の相対性による説明という道が断たれた今、われわれは「充足」の両義性 (duality) という問題に正面から取り組まざるをえない。すなわち、「充足」というひとつの事態のうちで、相反する性格が両立するということをはたして正当化するかどうかという問題である。これまで見てきたとおり、現実的存在の「充足」は、「生成 - 消滅」、「現実態 - 潜勢態」、「確定性 - 不確定性」、「主体 - 自己超越体 (客体)」、これらすべての対立のあいだに打ち込まれた決定的な転換点である。対立する性格が単なる矛盾にいきつくのか、格別のしかたで両立されるのか。ホワイトヘッド哲学が整合的な体系であるかどうかは、「充足」の両義性を正当化するかどうかにかかっている。

「充足」についてすでに明らかになっていることを確認しよう。(1) 「充足」は、主体の合生過程の完結をしるしづけるが、合生のうちに含まれる構成要素ではない。(2) 「充足」は、「当の主体の充足」でなければならない、合生の過程の最終到達点として過程に接していなければならない。(3) 主体の生成と客体への消滅、言い換えれば「主体 - 自己超越体」における「主体」と「自己超越体」とは、ひとつの事態である。したがって、生成から消滅への移行に介在する「充足」が、なにか段階的な移行をとまなう事態であることは許されない。生成と消滅のあいだに、べつの出来事が生じる余地はない。

この三点をふまえると、「充足」の性格はある種の「断面」でしかありえない。すなわち、(1) と (2) より、「充足」は合生の内部に含まれることなく、かつ合生と切り離されてはならない。内側に含まれることなく過程に接しうるのは、ただ生成と消滅の境界面

だけである。そして(3)から、生成と消滅の境にべつの出来事が介在することが否定されている。よって「充足」は、合生過程の完結という生成と消滅のあいだにある境界面であるということになる。

ホワイトヘッドの体系内に、充足を境界面として位置づけることができるだろうか。以下の記述は示唆を与えてくれている。

「〔充足によって〕現実的存在はその特定の個体そのものなのである。……「充足」の相における現実的存在という概念において、その存在は他の諸事物からの個体的分離を達成している。」(PR154)

「充足」は、現実的存在を他のものから分離させる役割をはたしている。「充足」が境界面付けることによって、現実的存在は独立した個体として成立している。みずからの生成過程から「分離」して特殊な個体となることは、現実的存在の「個体化 (individualization)」と呼ばれる。個体化は現実的存在の現実化ないし生成と同義である (PR154)。ここでは、「充足」は現実的存在を周囲と隔て、そのことによって生成させる断面として機能している。

しかし、ホワイトヘッドの体系内では、「充足」が二面性を有した「断面」であるという直接的な言及はなされていない。両義的な「断面」としての「充足」という概念を、ホワイトヘッドの体系内で正当に位置づけることができるだろうか。それとも、「断面」という表現は単なる比喩にとどまってしまうのだろうか。結論からいえば、「充足」をもたらす「切断 (decision)」<sup>8</sup>という概念によって、この正当化は可能になる。

ホワイトヘッドの“decision”という用語は、「意識的判断を意味するのではなく、「断ち切ること (cutting off)」というその語源的な意味で使用されている」(PR43)。合生の過程に切れ目を入れる「切断」によって、現実的存在は周囲から区別された「個体的分離を達成する」(PR154)。自己実現としてのこの個体化の達成が「充足」であり、その分離の達成をもたらすのが「断ち切ること」としての「切断」のはたらきなのである。それだから「切断」は、合生過程の「終わりにあたって「充足」を創出する」(PR48)ものにはかならない。

「切断」は、潜勢態としてはたらいっている単なる存在を、「現実的」存在にするとされる (PR43)。「現実的存在」は潜勢態 (= 客体) から生じ、主体としての自己を実現し、今度はみずからが客体となって他の主体のための潜勢態 (= 客体) としてはたらく。こうして、現実態はその誕生前と消滅後とを潜勢態にはさまれて、「切断」の瞬間にのみ主体として生起する。それだから、「現実態とは潜勢態のただなかでの「切断」なのである」(PR43)。「切断」の瞬間において現実態は潜勢態の流動を断ち切り、個体としての自己を確立する

<sup>8</sup> 山本訳の全集では「決断」と訳されているが、術語としての機能と、語源であるラテン語の *decidere* の成り立ち (分離を表す接頭辞 *de* + *caedere* 「切り取る」) に即して「切断」と訳した。本文中の引用にあるように、ホワイトヘッド自身も「切り離すこと (cutting off)」の意で用いると定義している。



のだ。

「充足」には「主体」の側面と「客体」の側面とのどちらともがあるが、ここまでのところ「切断」は主体の側面を切り出すことしか説明できていない。主体の生成をしるしづけている合生過程の内側の「断面」だけでなく、客体性を示す外側の「断面」もまた基礎付けられねばならない。

ホワイトヘッドは、この二面性を説明するために「切断」を二種類に分類する。

「超越的切断 (transcendent decision)」において、過去から現在の直接性への移行がある。「内在的切断 (immanent decision)」において、主体的形式の獲得ならびに諸感受の統合過程がある。」(PR163 - 164)

「内在的切断」と「超越的切断」という用語は、この PR163 - 164 で二度ずつ用いられているのみで、使用頻度は極端に少ない。しかしながら、二種の「切断」ははっきりとその性格を異にしている。「内在的切断」は常に、完結を達成する統合過程を決定する要因である (ibid.)とも言われるが、「完結の達成」とは「充足」のことにほかならない。したがって、主体が自身の「充足」を創出するはたらき、いわば合生過程の内側の断面をもたらすのが「内在的切断」であり、これまで見てきた「切断」はこちらの種である。たいては、他の主体に向けて客体として機能するときの「充足」は、外側の断面をなす「超越的切断」によって説明される。「超越的切断」が「過去から現在の直接性への移行」をもたらすと言われているのは、自己超越体が次の主体にとっての与件となることを意味している。

二種の「切断」の違いと、それぞれの「切断」が「充足」とどのような関係にあるのかをホワイトヘッドの言葉で確認しておこう。

「最終段階の「切断」は、現実的存在がその個体的「充足」を達成することによって、いかにして自らを超え出た未来のための定着に対して決定的条件を付加するか、ということである。こうして、「与件」とは「受容される切断」であり、「切断」は「伝達される切断」である。これら二つの、受容され伝達される「切断」の間に、「過程」と「充足」という二つの段階がある。「与件」は、最終的な「充足」に関しては未確定である。」(PR150)

みずからを越え出た次の主体へと「伝達される」のも、次の主体にとって過去からの与件として「受容される」のも、ともに自己超越体の役割である。したがって、「伝達される切断」と「受容される切断」とは、どちらも自己超越体としてはたらく「超越的切断」に分類される。過去から継承された与件によって生成の過程が始まり、個体的「充足」を達成することで自身の生成過程を閉じ、客体として自己超越していく。言い換えれば、「受容される切断」から合生の「過程」が始まり、「充足」に終わって「切断」が「伝達」され、さ

らにその「切断」は「伝達される」ことで次の主体にとっての「与件 (=受容される切断)」になる。

自己超越体から自己超越体への過程として記述されたこの一連の段階において、「充足」と「超越的切断」の順序に注意したい。「内在的切断」が「充足」を創出するのにたいし、「超越的切断」は「充足」が達成されること「によって」伝達され受容される (PR150)。つまり、「超越的切断」は「充足」のあとにある。したがって「充足」は、「充足」をもたらす「内在的切断」と、「充足」によって伝達される「超越的切断」とのあいだにあることになるのである。

もっとも、二種類の「切断」が区別されているからといって、一個の現実的存在の「充足」において「切断」が二度なされるわけではない。「充足」という個体的分離の達成を「内在的切断」がもたらす以上、現実的存在は生成し、消滅してしまう。この主体の生成と自己超越との間に、いかなる中間段階が介在することもありえないということは、すでに論じた (第2節)。自己超越しない「充足」はありえないため、「内在的切断」がもたらす切断面は、その同じ断面の反対側で「超越的切断」となっている。したがって、「内在的切断」が「充足」という「断面」を創出するさいに、「超越的切断」もまた創出されていることになるのである。あるのは「充足」というひとつの「断面」だけであり、その「断面」がもっている二面性が、その性格に応じてそれぞれ「内在的切断」と「超越的切断」と弁別されているのだ。こうして二種類の「切断」は、いわばひとつの「断面」の表裏となっている。

「生起の個体的直接性とは、主体的形式の最終的な統一性であり、その統一こそが完成した実在としての生起なのである。……「切断の瞬間 (decisive moment)」にあるこの統一は、その誕生と消滅とのあいだにある。」 (AI177、強調引用者)

「完成した実在としての生起」である、この「最終的な統一」が現実的存在の「充足」である。「充足」は、「切断の瞬間」において合生の過程に入れられた切れ目であり、そのことによって「他の事物からの個体的分離を達成する」 (PR154)。「切断の瞬間」に達成された「充足」は、「誕生と消滅とのあいだ」にあってその両端に接している。「誕生」の側は「主体の生成」に対応し、「消滅」の側は「客体としての自己超越」に対応している (cf. PR29)。現実的存在のこの「主体-自己超越体」というあり方において、「切断」はちょうど「主体」と「自己超越体」とを隔てつつ繋いでいるハイフンの位置に、充足という「断面」をもたらすのである。二元的対立のあいだに介在するこの「断面」によって、主体性と客体性とが離れることなく背中合わせのように接していながら、混ざり合うことなく際断されている。ここには矛盾も「二元分裂」もないし、ひとつの性格へと還元することによって対立が無化してしまうこともない。

こうして、「充足」という切断面は「主体 (=生成)」と「客体 (=消滅)」のあいだにあ

って、二元論的に対立するそれらの性格を「内在的」と「超越的」というふたつの「切断」によって表現していると言うことができる。

#### おわりに

「充足」を、主体側と客体側の両面をもつひとつの「断面」とみなし、その二面性を「内在的切断」と「超越的切断」によって基礎付けることで、「充足」がもっている一見矛盾する性格を整合的に処理することができた。「主体」と「客体（＝自己超越体）」という相反する二元論的対立は、「充足」というひとつの事態において正当に両立されうるのである。

「充足」は主客の二面性を有しているとはいえ、ふたつの「充足」に分かれているのではないから、相容れない二元論的対立を「二元分裂」にいたらせることはない。また、「充足」はひとつの事態であるとはいえ、混合されることのない二面性を有しているから、現実態（＝完全な確定性）と潜勢態（＝端的な不確定）とを同じひとつのものともみならずという単なる矛盾に行き着くこともない。さらには、「充足」というひとつの事態のうちで、「主体」と「客体（＝自己超越体）」との対立が解消されてしまい、対立しているそれぞれの性格が失われてしまうこともない。以上の議論をもって、「二元論的対立が、対立を保持しているにもかかわらず、ひとつの具体的事実において両立する」というホワイトヘッド的二元論の主張を、ホワイトヘッドの体系内で正当化しえたと考える。

#### 参考文献

- Nobo, J. L. *Whitehead's Metaphysics of Extension and Solidarity*, Sunny Press, 1986.
- Christian, William A. *An Interpretation of Whitehead's Metaphysics*, New Haven: Yale University Press, 1959.
- ドナルド W. シャーバーン (松延慶二・平田一郎訳) 『「過程と実在」への鍵』(晃洋書房 1994年)
- 田中裕 『ホワイトヘッド—有機体の哲学—』(講談社 1998年)
- 市井三郎 『ホワイトヘッドの哲学』(第三文明社 1980年)
- 中村昇 『ホワイトヘッドの哲学』(講談社新書メチエ 2007年)
- 『プロセス思想 第14号』日本ホワイトヘッドプロセス学会 2010年

**A.H.ジョンソンの三つの W について**

猪原政治（九州産業大学）

別ファイル参照